

〈随 想〉

——キャンベラ通信②——

人びとの生活とその周辺

渡 辺 精 一

たとえ何についてであるにせよ、その国のあれこれについて、短期滞在者が一定の評価を与えるというのは、極めてむずかしい。とにかく客観性を欠き、かつ不十分なものに陥りがちだと思うからである。この国へ来て早くも7.5カ月を送ったのだが、この数字は、こうした欠陥を補うには、むろんのこと、小さすぎる。にもかかわらず、このキャンベラ通信の2回目で、何らかの評価を与えざるを得ない、この国の人びとの生活とその周辺のことについて書こうとしたのは、逆にこの数字に、単なる一過性の旅行者と比較しての前向きな意義を加えてやりたいと、思ったからにほかならない。あえての釈明から書き始めるかたちとなったけれど、とにもかくにも“7.5カ月の印象記”であることに違いはない。

日本を発つ前、本屋の店頭で手にした、オーストラリアを紹介する気楽な本の第1ページに、“オーストラリア人は楽天的”と書かれていたのが、いま記憶のなかに強くよみがえっている。当地へ携えてきた小さな国語辞書を念のため参照してみると、「楽天」とは、人生をたのしむこと、のんきなこと、とある。この二つの意味は、互いにニュアンスを異にする。のんきだとはマイナス・イメージのように思え、そう言われるとオーストラリア人も快い気はしないだろう。だが、新聞に紹介されたその日のラジオ番組に、たとえば午後2時30分から別の内容の番組に変わるとあるのに、実際に切り替ったのは2時34分で、時刻のずれについてアナウンサーからは何の説明もなかった、という経験を私はすでに何回かしている。またつい先日、銀行へ赴いて定期預金を新しく組もうとしたとき、手許のコ

ンピューターを丹念に操作していた銀行職員が、「利率はいま分かりません」とこともなげに言う。明日か、明後日かなら分かるでしょうとつけ加えるのだが、その頃は所用で再訪できない私は、後日でよいから利率を教えてほしいと注文をつけたうえで、その場で契約を済ませたことであった。業界2,3位を争う銀行での話である。こうした例は、多分のんきの事例となりうるだろうと思われ、またそうされることにオーストラリア人も、渋しぶながらうなずかざるをえないだろう。

にもかかわらず私は、どちらかと言われるなら、人生をたのしむことというもうひとつの「楽天」の意味のほうに、アクセントを置きたいと思う。たとえば、土・日の完全週休2日を人びとは“人生”を楽しむために現に活用しているように私には映るのだが、このように楽しむ仕組みが制度化されていることがある点に、のんきの場合との違いを見るからだ、と言ってよいだろう。午後5時にはキチッと職場から解放され、いったん帰宅してシャワーを浴びるなどしたりしたあと、夕食を楽しむために外出する、などというおおむね一般化された生活習慣なども、たのしむ事例に属するだろう。キャンベラなどでは市街地にふんだんに芝生が配置されているのだが、日本でよく見かける「芝生にはいるべからず」の標識はまったく無く、むしろ芝生のなかに休憩用の机・椅子セット、さてはバーベキュー設備さえも備えつけてあったりするのもまた、“楽しむ”ことの具体例となるだろう。キャンベラだけでなく、メルボルン・アデレード・アリススプリングス・ホバート・ロンセストン、そして雑踏の都市シドニーをさえ含めて、オーストラリアのどの街でも私は、広く美しい公園と、そして郊外での植物園と自然動物園とが、まさに生活を楽しむために設けられているのを見せつけられてきたのである。

だが、にもかかわらず私はと、ふたたび書き継がなければならない。人生をたのしむということを、私は、制度化され、もしくは一般化・習慣化されたようなものとして限定的にとらえすぎたかもしれない。そうではなく、個々のオーストラリア人の生活様式・行動様式のなかに“人生をたの

しむ”特性がありうるのではないか。もしあるとすれば、それこそが多分、オーストラリア人をより説明することになるのではないか。そう思い直して私は、7.5カ月の生活経験のなかから、あれこれの具体例を改めて拾いあげてみた。それらの例は、簡単にまとめあげてを許しそうにないのだが、あえてそれを試みてみると、まず“他人の目や気持ちを意識しない”特性が浮かびあがってきた。

ネクタイにスーツ姿の紳士が、そして外出着をまとった淑女が、中心市街地をハンバーグを頬張りながら歩く。スカート着用の子高生が、街角であぐらをかいて雑談にふける。街なかで、裸足で歩く淑女がいる。ガレージ・セールでは、さんざん使い古した肌着や靴が、てらいもせず値札を付けている。そして街角を行き交う女性の服装が、しろうとの私にもそれと分かるほどに不調和である。まったくこの国には、ファッションなど、無いと言ってよいようだ。

“他人を意識しない”というのはしかし、とりあえずは美德である。他人に対し無用な干渉はしないと昇華するとき、美德は極まる。実際、他人を羨んだり、そねんだり、さげすんだり、憎んだりし、そしてそれらを口に出したりする例に、私はまだ出遇わない。恐らく人間同士の交際は、日本の場合と比べて、遥かに気楽であろうと思う。だが、こうして、他人とのかかわりあいを考慮に加えて見直してみると、“他人を意識しない”というくくりかたで事足りりとするわけにはいかないことにすぐ気付く。

“他人を意識しない”で行動するのではあるけれど、結果的に他人に親切であったり、逆にを与えたりすることが、決して少なくないからである。だとすれば、“他人の目や気持ちを意識しない”というくくりかたはまだ一面的であるにすぎず、恐らくは“自分がやりたいようにやる”こと、すなわち“気まま”な特性ととらえ直したほうが包括的だということになりそうである。

やりたいようにやった結果、他人に親切となった事例は、その受け手として私自身、少なからず経験している。よくあるのが、道を尋ねる事例で

ある。ある農家の扉を叩いて道を尋ねたとき、わざわざ外へ出てきて説明をし始めた主婦らしき人が、むしろ近道があるからとクルマを引っ張り出し、3、4キロ離れた地点まで私を先導してくれた。また、あるスーパー・ストアの前で出てきた人に道を尋ねたところ、ストアの3階の駐車場にクルマがあるのでと、私をそこまで案内して同乗させ、2キロほど先の目的地まで、ついでの方向でもないのに私を届けてくれたという事例は、その人の顔つきまで添えながら、私の脳裡にいまなお焼きついている。

タスマニアでの経験は、錦上さらに花を添える。私が初めに所属した連邦財政関係研究センターでは、年に3～4回、所員たちが交替して休暇をとっており、私もそれにあやかって小さな旅を経験することができた。そのタスマニアへの旅での、“親切”にかかわる体験のひとつが、海岸で砂に車輪をとられたときのことにある。レンタカーであったこともあって役に立つ用具は何も持っておらず、途方に暮れかかったとき、100メートルほど離れた民家から中年の女性が出向いてきて、他のクルマで引っ張ってあげましようと言いついて残して、クルマでどこかへ立ち去った。いぶかりつつ待つうちに、みすばらしい車が1台近づいて、50歳ほどとおぼしい男が仰向けに私のクルマの下にもぐり込んでロープを巻きつけ、運転席に私を指図してすわらせて自分の車でロープを引っ張った。やり直すこと2たび、3たび。やっと脱出できた喜びをそのまま、失礼かとは思いつながらも金銭を差し上げることで示そうとしたとき、強い姿勢でそれを拒んで、さっと引き返された。さきの女性の夫のようだったと後で推測したのだが、本来の職務をいっとき放棄しての献身に、私は心のなかで手を合わせた。

同じ街で、実はもうひとつ、嬉しい経験をした。その前の日の夕方に初めてこの街へはいつてきたとき、予約していた宿舎がどの辺りにあるか、簡単に見当がつきそうになかった。たまたま停めたクルマのそばの建物から出てきた屈強な3人連れの男たちに尋ねてみると、これからわれわれが行くところだからついてこい、という。小さな街にしてはかなりの距離を走るの、もしやと怪しみ始めたとき、不意にクルマを停めて降り立ち、

私のほうへ近付いてきて言う、魚は好きかと。戸惑いながらも好きだと答えると、大きなアイス・ボックスを開けてどれでも1匹とれ、と言う。見ると、平均体長40～50センチほどもあるマスなどが20尾ほどもはいっているだろうか。最も小さそうなのを一尾、家内がとりあげて、いくらだと聞くと、無料だという。なぜと問うあたりからお互いの心の窓が開かれ、開かれた窓から話を聞くと、この3人は当の宿舎の泊まり客で、これらの魚は今朝早く漕ぎ出して3人で釣ってきた、いまこのマーケットで売るつもりだが、その1尾はわれわれが今宵食べる2～3尾と一緒にして除いておく、などということが分かった。それから1時間ほどして呼びに来たので彼等の部屋へ出向くと、三枚におろした魚の身を見せ、なまのままでよいか、それとも油で料理したほうがよいか、と聞く。なまですぐと答えると3種類の魚の身を取り混ぜて4～5枚、無雑作に手渡してくれる。とっさのことで、家内が部屋へ戻り2時間ほど前に買い求めた鶏卵を持ってきて、せめてのお礼にと差し出すと、さきの砂浜の男と同様に強い拒否の姿勢を見せて言う、タスマニアン・ホスピタリティだ、と。そして私にビールをつぎ、乾杯だ、とも。お蔭で今宵の夕食はサパからディナに変わったと思わず口に出た私のその言葉に、お世辞を言う気持ちのひとかけらも含まれてはいなかった。

親切とは逆に、やりたいようにやった結果、他人に迷惑を与えてしまう、という事例にも実はこと欠かない。ANUの各種の研究センターに所属する研究者たちには、研究室のドアを開けたまま仕事をする人が多い。連邦財政関係研究センター所属のZ教授はどうやらクラシック音楽好きと見えて、ポケット・ラジオをつけ放しにしながら仕事をしていることが多いのだが、イヤホンで聴くわけでもないので開けられたドアから音が廊下へ流れ出し、お蔭で2部屋を挟みかつドアを閉めてさえ私の研究室のなかへまで、音が染み込んでくることがあった。私自身クラシック音楽の愛好者ではあるのだけれど、こちらの都合にお構いなく聴かされるのは、やはり御免である。

キャンベラでのゴミの収集は、月曜日と木曜日の週2回、未明に行なわれる。住んでいる大学の宿舎では、直径50センチ、高さ70センチほどの金属製の円筒型容器が2箇ずつ各戸に用意されている。買い物の際にスーパー・ストアなどから貰い受けたポリ袋にゴミを入れ、口を締めてその容器の中へ入れ、容器ごと宿舎の前の道路へ戸毎に出しておく習わしとなっている。容器の中へうまく入れられないゴミの場合、別のゴミを入れた容器にぴったり添わせて出しておいても、容器にはいっていないというので収集して貰えずに置き去りにされてしまう。風の強い夜であった。ポリ袋3箇を重ねて入れたひとつの容器が、朝起きてみると、風に倒されていた。横になったその容器の、中に1箇、外へ半分だけ出かかって1箇、完全に外へ出て1箇という状況で、ポリ袋3箇のゴミが収集されずに残されていた。並べておいたもうひとつの容器のなかのポリ袋は収集して貰えたようで、その容器は風に倒されてはいなかった。少なくとも理解しえたことは、容器にはいっていても、その容器が横になっていたのでは収集して貰えない、ということである。つけ加えていえば、収集時刻は午前4時半前後で、収集車の音がなぜか大きく感じられ、ために目がさめてしまうことが、極めてしばしばある。これらのことに対しては、収集業務を担当している役所や公務員労働者の側に、恐らくそれなりの言いぶんがあるのではあろう。かりにその言いぶんにも合理的根拠がありそうに見えても、市民の受ける迷惑が依然として残るのは確かであるし、その言いぶんも認めつつなお迷惑を解消する途が果たして皆無だと言えるのか疑問も残るのである。

他人に迷惑という事例に、前回述べたC銀行の暗証番号をめぐる措置なども、恐らく入れることができるであろう。そう言えば、当の銀行職員は、最後まで、アイム・ソーリとは言わなかった。このケースでは、銀行なり職員なりの側に手ぬかりはないとみずから信じてのこのようなので、言わなかったことにそれなりの理はあると言えよう。だが、言うべきではないか、と思えるような場合であってさえ、オーストラリアの人びとはなかなかアイム・ソーリとは言わないようなのだ。

たとえば、これも前回述べたように、5月7日に私は大学の Housing Officeが管理する、ある宿舎から別の宿舎へ移ったのだが、その際に敷金をめぐってひとつの疑問が発生した。移るにあたって旧宿舎の家賃の清算と、新宿舎の2週間ぶんの前払い家賃、および敷金の支払いとが行なわれた。かつて旧宿舎に仮に入居した際に支払っていた240ドルの敷金に対する措置が何ら為されていないと察した私がその旨を告げると、担当の職員は迷惑そうな顔つきをあらわにしつつコンピューターのキイをたたいた。その結果、私の申出を認めるべきことに気付いたようで、暫しの考慮のあと、いま前払いをした家賃の充当期間である2週間に続く対応日数の家賃にその敷金を充当することにすると、こともなげに私に言う。もし申し出なかったらその敷金はどうなったかと思う私の心の隅を、アイム・ソーリのひとことの聞けなかった寂しさがずっと吹き抜けた。

このようにミスによるのではなく、意識して迷惑をかけながら、なおアイム・ソーリと言わない事例にさえ、私は出遇った。8月19日、家内の妹の家族5名が東京からキャンベラに来る、という。たまたま日曜日でもあるので、クルマでの市内観光案内を買って出た。だが、クルマがもう1台、必要である。大学の近くのレンタカー会社へ出向くと、うょうど1台残っている、という。日曜日の1日だけ借りたいと申し出ると、日曜日は休業するので土曜日の正午から月曜日の午前9時まで貸す、ただし賃料は1日ぶんの59ドルだけでよいと言って、まったく同じことが明記されている印刷された1枚のチラシを私に与える。あげく、頼みもしないのに名刺を出し、そこへ賃料59ドル、保証金200ドル、合計259ドルと書いて私に手渡した。要求に応じて私が免許証を見せると、契約書に必要事項を書き込み、では明日の正午に259ドル持って来てくれ、という。その日は借りる前日の金曜日であった。夕刻帰宅するとすぐその会社から電話がはいり、別人の声でいう、その後ボスが帰社して2日ぶんの賃料を払ってもらいたい、ただし、100ドルに減額すると言うので承知してくれ、と。あとは、承知しろ、いやだのやりとりが数分間続くことになる。根負けした私が、とう

とうひとつこと、キャンセルすると言うと、相手は直ちにOKと言って電話を切った。察するにそのひとつことを私に言わせたかったらしい。100ドルに減額する提案のなかに詫びる気持ちの一端を察知することができてさえ、私にはアトム・ソーリの言葉を長いやりとりのなかにとうとう聞けなかった無念さが残った。

こうした事例に私は明らかな不合理を感じるのだが、不合理というならもうひとつ、日常気にしている次のことに触れておかざるをえない。たとえばランチをとるとき、料理された各種の肉や魚や穀類や、そして野菜や果物などのなかから、自分の好むものを好きなだけ皿の上に寄せ集めて、最後に代金を支払うというシステムをとるレストランや食堂が、オーストラリアでは少なくない。支払うとき、選び集めたものが何であるかを問わず、一律に重さを測り、その重さに従って支払うという方法をとる例が、ひとつある。選んだものを問わずに、という点に日本人の感覚はまずひるむであろう。ところが、重さを測る代わりに、選ばれたものをレジ担当者が見つめて、エイヤッとはばかりに支払うべき金額をのたまう、という方法をとるところも、意外に広く見うける。ANUの職員食堂において、すでにそうなのである。まさに目の予算そのものであって、日本人の感覚には間違いなく不合理と映る事例だと言えよう。

迷惑の話がやや脱線しかかったようだが、ここまで書いて来て、さてと改まるとき、オーストラリア人の特性はいったいどのようにとらえるのであろうか。多様な人びとの多様な行動のなかから、共通した特性を抽出するというのは、実は容易ではない。にもかかわらず、冒頭に紹介したように、楽天的だととらえる試みがすでに見られ、7.5カ月の私の経験がそれに多少のずれを感じるという結果になったようなので、代案を用意しなければ私の内心も落ち着きそうにない。こうして、とつおいつしながら頭に浮かんだ代案は、無頓着だ、という特性である。これまで述べてきた事例の恐らくすべてが、このひとつことのなかに包み込まれる、と言ってよいだろう。

そう言えば、政治のことは政府まかせという風潮が、建国の昔から現に
 続いているとよく聞かされるのだが、これも殊によると無頓着の範ちゅう
 に属するのかもしれない。ちなみに言えば、政治制度はイギリスを範にし
 たのであるにもかかわらず、市町村は憲法上認知されておらず、地方自治
 とか草の根民主主義とかは、この国では真顔に語る対象とは位置づけられ
 ていないように見える。こうなると、しゃれではないけれど、無頓着さに
 無頓着ではいられなくなってこようというものである。それはともかく、
 まかされた政府は、それなりに答えている、と言える一面を確かに見せて
 いる。少しばかりの例を生活環境整備に引くならば、Freeway や High-
 wayなど幹線道路の整備は行き届いていて、日本の高速道路に相当する
 Freewayは無料だし、塀もなしで、走る気分は日本より遙かによい。駐車
 場は、需要に対応しながら、街なかのそこここに、かなり用意されている。
 原則として有料だが、30分ごとに20セント（約20円）といったぐあいに、
 低料金である。ただし、警察官による駐車違反の取り締まりはかなり厳し
 く、僅かな時間超過でも30ドルていど（約3000円）の罰金が課せられる。
 就業時間に合わせて、午後5時すぎ、および土・日曜日は全面的に無料開
 放となる。公衆便所やバーベキュー設備なども市内に適宜配置されている
 し、後者のなかには熱源としての電気が無料で利用できるところもある。
 家庭で使用する電気・上水道・ガス・電話なども、かなり低料金である。
 あれこれと、良いことを羅列しすぎたかもしれない。逆のことを多少とも
 つけ加えておこなら、公衆電話がなぜか極めて少ないのが、やはり不便で
 ある。道路も市街地のなかの道路や地方の枝線道路などには、かなり損傷
 しているところがある。キャンベラを恐らく唯一の例外として、道路の方
 角と道路名の標識が大いに不備である。シドニーなどでは交差する道路の
 名称を知ろうとしても、ついに知ることができずに走り抜けるということ
 が、迎える交差点ごとに発生し、ついぞ目的地とかけ離れたところまで、
 他のクルマの流れに追われるようにしながら走らされてしまう、というこ
 とがよくある。

クルマの話が重なったが、ことのついでに言えば、キャンベラはクルマの街である。クルマがとくに多いというのではない。キャンベラは計画して作られた人工の都市だが、その際、クルマ対策を思いきって折り込んだらしいということがひとつ。そしてもうひとつは、その結果としてと言うべきかもしれないが、クルマなしでは生活がかなり不便だということ、である。前者について言えば、市の中および周縁部を制限時速100キロの幹線道路の何本かが走り、それらの道路に囲まれたそれぞれのエリアに枝線道路が縦横にめぐる。市内に配置された3箇所の主要業務・買い物地域には、広大な駐車場が整備されている。次に後者については、路線バスが網の目状に走るのだが、ターミナルが3箇所に分かれているため、利用に乗り継ぎを要することが少なくなく、時間のロスがしばしば苦痛となる。20業者ほどが集中立地している生鮮食品市場が市内に1箇所あって、1週間に1回ほどはそこへ出向くこととなるのだが、買い求めた食品の荷は大きく重い。バスでの運搬は、かなりきつい。自転車による移動も考えられなくはない。事実、通勤に自転車を利用する人を結構見かける。だが、その多くは意図的な健康対策だと、私には映る。キャンベラは丘陵地帯に作られた都市であるため、道路のスロープがかなり多い。歩行者と自転車の専用通路は、あったり無かったりで、無いところを走るときは、疾走するクルマの群れの傍で、まさに命がけである。

クルマの街だということは、自転車はむろんのこと、歩行者をもともとすると軽視しがちだということを意味しやすい。たとえば、車道に沿った歩道を歩いていると、あるところまででそれが忽然と消えてしまうことに、よく出遇わす。なぜと気にかけるうち、それらのところに共通したひとつの特徴があることに、最近気がついた。住宅が建てられていない、という特徴である。病院や、事業所や、さては各国の大使館やが道路沿いに建てられていても、お構いなく歩道が消える。それらの建物は住宅ではないからである。住宅があれば歩く人も必ず出てこよう、だから歩道を作る、だが、というのであるらしい。しかし、大使館だって歩く人は発生する。住

宅が存在する彼方から歩いてくる人は、どうなるのか。そうした人びとは、歩道の消えたところから、そのまま続けて、しかし今度は芝生や雑草の上を歩くことになる。草が踏み潰され、土の面の露出した“代わりの歩道”が、こうして作られてゆく。

車道を横切る横断歩道も、キャンベラでは意外に少ない。さすが交差点には横断歩道がおおむね設けられているのだが、横断時間がおしなべて短い。それやこれやで、横断歩道のないところを横断する人びとが極めて多いし、そういう場合はむろんのこと、横断歩道のあるところでも駆け足になりがちである。信号が赤でも横断する人びとが少なくなく、つい先だって、そうした人びとを見遣りながらなおたたずんでいた、数名の児童を連れた年配の女性が、警察官も歩き出したのを見て、おずおずとその後に従う情景を目のあたりにしたことであった。むろん、信号は、まだ青にはなっていなかった。実際、みんなが渡るなかで、法規に忠実に立ち続けるというのには、くだんの警察官だって、勇気を必要とするのだ。

クルマと対比させて、歩行者は“弱い者”になぞらえられることが、よくある。そういえば、それは政治の面に、なにも限らない。経済の面でも、同様のケースに出遇うことは容易である。暗証番号の一件が機となって、その後、私は預金口座をC銀行からN銀行へ変えた。手続きの過程で私は、普通預金が通帳型とカード型の2種類あって、それぞれ別契約になっていることを初めて知った。年利は、次のように違う。通帳型は200ドルから2000ドル未満7%、2000ドルから1万ドル未満10%、そして1万ドルから2万ドル未満10.5%、以上である。他方、カード型では、1ドルから2000ドル未満7%、2000ドルから1万ドル未満9%となっている。カード型なら200ドル未満でも預金できるが、1万ドル未満どまりである。また、2000ドルから1万ドルの場合の利率が、カード型のほうが低い。なぜ、違うのか。察するに、カードはクレジット・カードの機能をもつとされているからなのであろう。ひとつ注目したいことは、1万ドル（約100万円）までの2段階の利率の違いが、3%もしくは2%と、開いていることである。

少額預金者の、相対的な不利が、それだけ大きいと言えよう。

もうひとつ興味があるのは、定期預金の利率である。この銀行の普通定期預金で5万ドル以下の場合を紹介すると、その利率は期間に応じ、表に示すとおりになっている（7月18日現在）。預金期間が長いほど利率が高いとは言えないなど、注目したいことがいくつかある。ここではとくに、おカネを30

7日以上30日未満				9.00%
30	〃	60	〃	13.25
60	〃	90	〃	14.00
90日	〃	4カ月未満		14.25
4カ月以上12		〃		13.75
12	〃	13	〃	14.25
13	〃	14	〃	13.75
14	〃	36	〃	13.25
36	〃	60	〃	13.00
60	〃			13.00

日以上、わけても90日以上寝かしておくことのできる人は、普通預金に比べてかなり高い利率で運用できることに注目してみたい。金額が5万ドルを超える場合には、僅かではあるが、利率はおおむね、さらに高くなる。寝かせるおカネの持ち合わせのない一般庶民には、この有利な機会はむろん利用できない。

預金金利が高いぶん、貸出し金利も当然高くなる。たとえば、この銀行の住宅ローン年利は、変動型16.00%、固定型15.25%である（10月15日現在）。成人男子平均所得はいま年額27,700ドル（約277万円）で、決して高くない。それゆえ、一方で定期預金を組みたくとも組めず、他方で住宅ローンを利用したくとも簡単には踏み切れない、という人びとの範囲が広がる。もしローンを利用すれば、利息の重圧に喘ぐのは必定である。こうしておカネにゆとりのある人と無い人との格差は、預金・貸出しの双方をとおして、確実に広がる。

この国の平均的な所得水準の人びとにとって、支出面での重荷がたとえば住宅ローンの返済のような特別の経費だけに限られるのかと言えば、決してそうではない。確かに生活必需的な食料品に、低価格のものが少なくない。酪農品・食肉・パン・フルーツジュース、そして国産の野菜と果物、それにワインやビールなどである。ぜいたくを言わなければ生活に不自由

はないと言ってよいのだろうが、このことが、ぜいたくを言えないという含みをウラハラにもつということに注意したい。

たとえば、多くを輸入に頼っている工業製品では、ボールペンからクルマに至るまで、国内小売価格がかなり高い。羊の国でありながら、ほんの僅かの数の手編み製品が採れるほかは、セーターはほとんどすべてが輸入品であって、いずれも価格は決して低くない。こうして、たとえば、とても新車は買えないがクルマはいわば生活必需品のようなものなので、という事情がこの国に、かなり古い年型の、かつ傷だらけの中古車を、広く走らせることとなった、と言えるのではあるまいか。ガレージ・セールがやたらと開かれるのも、ファッションに関心が薄いのも、さては自転車盗難が少なくないのも、いずれも恐らくは共通の根をもつのではないだろうか。自転車などはとても断ち切れないような太い鎖で鉄柱などにくくりつけておかなければ盗難に遇ってしまうようで、駅前に放置する日本の情景など、この国の人びとにはおよそ考えられないことであろう、と思う。ただし、ぜいたくを言えないとは、高価格のゆえに買えないというだけでなく、価格の低い食料品じたい、たとえばリンゴ・トマト・ジュース・パンなどの例に見るように、品質改良の余地が明らかにあると思われるものが少なくないのであって、それへの希望さえ充たされないということをもまた含んでいることに注意しておきたい。さらに言えば、こうした不自由さを克服することが、そのまま“ぜいたく”を意味することになるのか、という課題もここには残されているのである。

この11月21日に発表された統計局の1988—89年家計支出調査によると、この国の人びとの家計支出は5年前に比べて住宅と健康が増え、食料品・衣料・燃料・酒・タバコなどが減っている、という。不自由さが募ってきている、と言ってよいだろう。さらに、この春からの景気後退は、最近の失業率8%超という数字に代表されるように、一段と深刻化している。来春には好転するという政府の楽観的な観測が報道されるのを横目に、化学繊維の攻勢の陰で前途を悲観した畜産業者がみずからの銃で大量の羊を処

分して穴に埋めるという画面が、このところテレビで何回か放映された。工業製品の輸入は、鉱石・羊毛・牛肉などの輸出でまかなってきたこれまでの貿易パターンが、いま変化を余儀なくされつつあるように思える。人びとの生活の不自由さがどうなるのかという展望にとって、環境条件は決してよいとは言えない。

もしもこの国の人びとが、生活の不自由さを少しだけでも減らし、そのぶん人生をより楽しみたいと思うのであれば、経済行動にもう少し競争を育み、政治活動にそれなりの参加を仕込むことが望まれるように、私には思える。言い換えれば、“無頓着”さからの皮一枚の脱皮が望まれる、ということになるだろうか。だが、そうしたことへも、ことによると無頓着さが壁を作りかねないと、一沫の危惧を抱きたくなる“7.5カ月の印象”である。